ISSN 0286—0627

Nature Conservation Society of Hokkaido

北海道の自然

社団法人 北海道自然保護協会　1986年10月号　No. 29（通巻No.83）

釧路湿原
キラコタン岬
写真：新庄久志

北方圏の緑化に思う

◎真鍋　智紀

緑化という言葉が盛んに謳われ侵透してきたことは、我々育苗家にとっては勿論のこと、一般国民にとっても誠に喜ばしいことである。

数少ない経験の中から植物にとり気象的に最悪の条件に位置する道東圏を将来緑豊かにする為の樹木をここで紹介してみよう。

常緑針葉樹の効果

四季のうち特に緑のない季節があまりにも長いのが残念である。この期間を最少限にとどめる為には、それに見合った常緑樹を高・中・低木にかかわらず一本でも植栽すべきである。また仮に落葉樹であってもその期間、独特の味または美しい特色を味あわせてほしいものだ。

北国を代表する針葉樹にエゾマツ、トドマツそしてカラマツの三代樹種を挙げることが出来る。特に常緑樹であるエゾマツ、トドマツの冬期間の姿は実に私達に潤いと安らぎを与えてくれ、降雪直後の姿は何とも表現しがたい独特の美しさとロマンを与えてくれる。

しかし、山地は別として、ここ道東の平坦地には残念な事にほとんどその姿を見ることは出来ない。まれに農家の屋敷林等に見られるのは幼齢樹より植えられ傷みに傷んだ末、成木になったものである。何故なら、これら両者はイチイ（オンコ）を含めて陰樹であるからだ。したがって優秀な植栽技術を結集したとしても自然条件に逆らうことは出来ない。冬期間、道東の平野部を車で走り常緑針葉樹が目に入った時、その樹木のほとんどが外来樹木であることに気付くだろう。

その第一に挙げられるのはコロラド原産のプンゲンストウヒ、別名ブルースプルース、コロラドスプルースとも言う。この樹は陽樹であるが陰にも強く最も場所を選ばず、なじむ樹木である。改良品種にコスター、モヘミー、ホプシー等がある。第二に北海道の自生種にヒメコマツ、別名北五葉松、日高五葉松があるが、これも比較的無難である。しかし、もっと身近な朝鮮五葉松があり、かつてカラマツ防風林として道東の風物詩とされた有名なカラマツに代るべき樹木として、もっと見直されるべきものだ。これは勿論葉の量も多く、移植に最も強く、道東の冬期乾寒害にも申し分なく、前述のプンゲンストウヒ同様、場所も選ぶことなく最も取りあつかいが容易である。高木常緑針葉樹で最後に挙げたいのは一般的になじみがないがグラウカトウヒである。北米産でクリスマスツリーの名で知られ、別名ホワイトスプルース、姿はヨーロッパトウヒに似ているが材質は北海道産のクロエゾマツに近い。生長も早く、半陰樹でありながら陽光にも強く、道東でアカエゾマツ、ヨーロッパトウヒの困難な場所ですら良い生長がみられる。したがって将来大いに期待されるのである。

次に低木類について紹介しよう。すでに常緑のグランドカバーとして実用化されているモンタナ松類、プミリオ（モンタナハイマツ）、ロストラータ（立性モンタナマツ）、ムゴ・ムーガス（チロリアンマツ＝矮性モンタナマツ）は一般化され私達育苗家には誠に喜ばしい限りであるが、その他のビャクシン類などはまだ一般化されておらず、今後何かの機会に是非詳しく紹介したい。

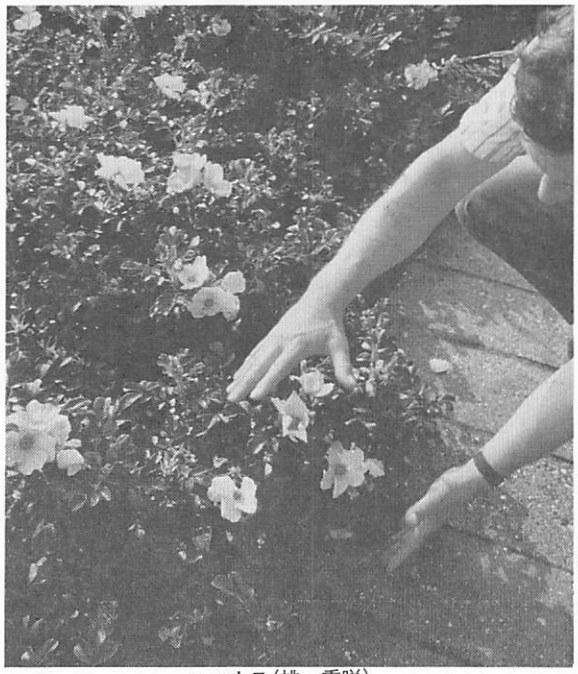
ハマナスの品種さまざま

今一つどうしても紹介したいものがある。それは北海道の花「ハマナス」だ。64年には「はまなす国体」がある。これを機会に是非知って戴きたい。北方圏、特に北ヨーロッパでは最近特に斜面、道路等のグランドカバーにハマナスの改良種が各地で使われている。最近北ヨーロッパ各地で使用されているものの中で、ここ日本に特になじむ事が出来、そのうえ特色を持ったものを紹介しよう。

①白一重ハマナス。一重のハマナスの白色種だ。ただ違いとしては花期が原種と異なり晩秋の霜の来るまで咲き楽しませてくれる。②八重ハマナス。赤色、八重咲で花期も同じく長く、形状は原種同様ハマナスの内で自然型では背が高く「大がら」である。但し刈込にはハマナス原種同様強く管理次第で背丈を自由に決めることができる。③桃一重ハマナス。めずらしく桃一重咲でハマナスの種類で最も背丈が低く矮性種で姿も美しく植栽後の管理が容易である。花期も前種同様長い。④桃一重ハマナス。これは花は前種と類似しているが色がやや濃く、姿がまったく

異なり完全な這性である。勿論、高さは最も低い。⑤桃一重ハマナス・小輪咲。これは葉に特徴があり小さく細葉で、濃い緑色の葉で秋にはきれいなオレンジっぽい茶色になり美しい。実は丸く赤色で樹高は七〇センチメートルになる。⑥桃一重ハマナス・小輪咲。ニチダとハマナスを交配し作出したもので葉数がハマナス中、最も多くグランドカバーとして緑量が多くヨーロッパで一番使われている種類の一つである。花期は原種同様である。⑦赤八重房咲きハマナス。花色は紅梅に似てハマナス中、最も華やかで美しい種類で高さは自然条件下で八〇センチメートル位になる。花期は春から晩秋までとても長く楽しませてくれる。⑧桃八重房咲きハマナス。八重桜のように桃色で美しく、前種同様一房に十個以上の花を付け、高さも同じく八〇センチメートルになる。形状も花期も同じで長い。刈込みにより高さも自由に押えることが出来る。枝もやわらかく多雪地帯のグランドカバーにも何ら問題がない。

以上何種か紹介したが、これから栄えんとする若い我が郷土、北方圏の緑化の中で美しく変化のあるこの大自然を借景とした「緑豊かな」ふる里を作る為、微力ながら私も頑張るつもりである。何かの参考にして戴ければ幸いと思う。（真鍋庭園）



ハマナス（桃一重咲）

自然豆事典⑫

●富栄養化とバイオフィルター

雨水や湧水など天然水が溜まった湖沼や湿原は栄養塩類に乏しいが、その周囲や基盤の岩石の風化や地表水の流入が続くと次第に無機物が蓄積される。また、そこに生育する植物や動物の生産も栄養塩類の増大をもたらす。

これらは自然的富栄養化と呼ばれるものだが、これに人間の活動が加わるとしばしばその作用は加速される。この両方を含めて富栄養化という。

富栄養化がある限度を超えると汚染とか腐水化といわれる状態になる。

釧路湿原が来年度には国立公園に指定される見込みになったが、釧路川水系の下流域に所在することと、その周辺には北海道の代表的といってもいい牧野地帯が展開することは、湿原とその周辺の湖沼について、その富栄養化に十分な注意の必要性を示唆する。

牧野の生産性と、湿原の自然性の維持については単に地域区分や制限を行うだけでなく、その両存を図るための緩衝地帯の設定など積極的な対策を考慮することが望ましい。

たとえばヨシ群落などが富栄養化を喰いとめる一種のフィルターゾーンとして利用されることがある。こうした効果の期待される生物的フィルターがバイオフィルターと呼ばれるもので、今では小規模な実験的レベルを超えてかなり大規模なスケールのものが考えられつつある。その効果にはヨシ群落に付随する微生物の働きが大きいものとみられる。（辻井達一・北大植物園長）

シンポジウム「環境を守るために」報告要旨

われわれが人間と自然の保全について考えるための参考にするために当協会は表記の根本的テーマについてシンポジウムを開くことを先月号でお知らせしましたが、今回は各報告者がよせてくださった報告要旨を掲載します。この機会に多数の人々がおいで下さるようお願いします。シンポジュウムの日時は十一月三日午前十時から午後四時三十分まで、場所は札幌市中央区北四西七、北農健保会館三階「芭蕉の間」です。

テーマと報告者、報告要旨

①「開発と自然保護」

小関隆祺（北大教授）

開発という言葉はかなり多義的であるが、ここでは「産業を興して天然資源を人間の生活に役立たせること」（広辞苑）というぐらいの意味で使うこととする。結局は自然を環境としてとらえるか、資源としてとらえるかのどちらかに入ることになるだろう。

自然保護という概念もまた甚だ多様である。人間の生活と直接的にかかわるという意味では資源保護が自然保護の中心問題のひとつとならざるを得ない。最近では、ナショナルトラスト運動などにみられるように、文化財と組合せた自然保護も主流になってきている。人間と自然との関係をきちんと見直していかないと、高い文化水準に達した現代社会の諸矛盾を克服することは困難となる。

今年の七月には地球上の人口が五十億人を超えたという推計がある。開発と自然保護はわれわれにとって古くて新しい課題である。

②「森林をどう守るか」

鮫島惇一郎（自然環境研究室主宰）

有為転変という言葉がある。万物が常に変化することをいい、森林もこの限りでない。同じ針葉樹林と表現されても、アカエゾマツがトドマツに替り、シラカンバ林がやがてトドマツや広葉樹の混じった林になったりする。自然の森林はゆっくりではあるが常に変化しつづけている。この動きを正しくとらえることが森林保護の第一歩と考える。

森林は木材生産の場としてあるだけでなく、そこに森林があるままで果す機能に次第に重要性がでてきた。人は食べるためにかつて森林を伐り開いたが、これからは人が生きるために森林を造らねばならない。

保護すべき地域、自然物はそれだけで保護されているわけではない。それらをとりまくより広大な、より自然な営みがあってこそ成り立っている。したがって、ごく普通のありふれた自然を確保しておく必要がある。

③「自然と人間に関するメモ——原子力発電について考えるために」

田中　一（北大教授）

1、自然は主系列（無生物）、二次系列（生物）および三次系列（知性体）の三つの系列からなりたっており、これらの系列はたがいに運動度がことなっている。これらの三系列が調和的に共存できるかどうかが自然と人間に関する基本的課題である。

2、自然と人間との調和の条件（略）。

3、一つの道（略）。

4、偶然性と目的意識性（略）。

5、結論

（1）運動度の異なる三系列が安定して共存することは可能である。

（2）歴史は創造であり、あらかじめ予定された道を歩んでいるのではない。創造すべき中身は現在必ずしも明らかではない。

自然保護のような大事業には、世界の在り方を全面的に描くことが求められるであろう。

④「環境と調和できる社会」

中野徹三（札幌学院大学教授）

1、「環境」と人間

この問題を考えるためには、私たちが日頃何気なく使っている「環境」とか「自然」という概念を、かなり厳密に分析するところから始めなければならない。例えば、環境は、人間の手が入っていないか、あまり入っていないとされる「自然環境」と「人工的環境」に分れるが、ここで主体となるのは、環境を選択的につくりかえる人間の力能の発展である。そしてこの人間自身が、同時に自己が改変した環境によって形成される。最初に、この関係を考察する。

2、「環境」と人間社会のありかた

環境の変化が人間にとって破壊的なものとなる諸条件（物質的および社会的な）はなにか。そして、環境とその変化が、人間にとってもっとも望ましい関係とは、どういう関係であり、さらにそれを保証する社会と人間のありかたはどんなものか。現代思想とエコロジストの注目すべき見解を参照しながら、仮説的な問題提起を試みる。

行事案内

☆自然観察会
晩秋の円山を歩く

天然記念物・原始林円山に登ります。秋の自然をじっくりとお楽しみ下さい。

期日　十一月九日(日)
講師　原　松次、福地郁子
集合　午前十時、円山公園バスターミナル待合室集合
解散　午後二時、円山公園バスターミナル
持物　雨具、筆記用具、昼食と水
参加費　無料
雨天中止〈小雨決行〉

☆チャリティー個展

当協会後援の「北海道自然一〇〇選記念桑原宏チャリティー個展」が開かれます。ぜひご鑑賞下さい。

期日　十月十六日(木)～二十一日(火)
　午前十時三十分～午後六時三十分
会場　札幌・アートギャラリー〈さいとう〉
　札幌市中央区南一西二　丸一ビル二階
後援　朝日新聞北海道支社、当協会、森林文化協会

北大植物園ライラック並木(桑原　宏画)

協会の活動

(会場称略)

○昭和六十一年四月十二日(土)
第一回常務理事会
主な議題
一、役員改選の件
二、シマフクロウ保護の件
○四月十四日(月)
第三回選挙管理委員会
　公示結果の確認
○四月十六日(水)
第一〇〇回理事会
主な議題
一、役員選挙推せん候補の件
二、入会申込者承認の件
○四月十七日(木)
第四回選挙管理委員会
　推せん候補者受付
○四月二十一日(月)
第五回選挙管理委員会
　投票用紙の発送
○四月二十六日(土)
第二回常務理事会
主な議題
一、昭和六十年度事業報告・収支決算の件
二、昭和六十一年度事業計画・収支予算の件
三、シマフクロウ保護の件
○五月六日(火)
第六回選挙管理委員会
　開票
○五月十七日(土)
第一〇一回理事会
主な議題
一、昭和六十年度事業報告・収支決算の件
二、昭和六十一年度事業計画・収支予算の件
三、役員選任の件
○昭和六十一年度通常総会
　議題
一、昭和六十年度事業報告及び収支決算
二、昭和六十一年度事業計画及び収支予算
三、役員の選任
○第一〇二回理事会
　主な議題
一、会長、副会長及び常務理事互選の件
○五月二十七日(火)
「コウライキジの捕獲禁止について」の意見書」北海道知事あて提出
○六月四日(水)
第三回常務理事会
　主な議題
一、昭和六十一年度計画の件
二、会務分掌の件
三、知床国立公園内森林伐採問題の件
○六月十三日(金)
第四回常務理事会
　主な議題
一、昭和六十一年度計画の件
二、知床国立公園内森林伐採問題の件
○六月二十八日(土)
第一〇三回理事会
　主な議題
一、昭和六十一年度計画の件
二、入会申込者承認の件
三、知床国立公園内森林伐採問題の件
○七月十一日(金)
第五回常務理事会
　主な議題
一、昭和六十一年度計画の件
二、諸規程改正の件
三、知床国立公園内森林伐採問題の件
○「知床国立公園内の森林伐採計画について」要請書、林野庁長官あて提出、同時に環境庁長官、北海道知事あて同上に対する配慮要請

「北海道の美林を歩く」報告

紺谷　友昭

札幌などに住んでいるわれわれの近くにあるのは放置されて荒れ放題の雑木林であり、遠くの知床からは自然林を手をつけずに守ろうと呼びかける声が聞えてくる。よく管理された森林はほとんど見ることがない。日本でもっとも森林に恵まれている北海道の中でも立派な森林を見て人間と自然とが調和している姿を実感すれば、そのような世界を広げようとする一つの力になるにちがいない。これが、この企画の目的であった。

当協会が企画して朝日新聞北海道支社と共催し紙面で報道してもらう。事務は朝日旅行センターが当った。当初、会報と同封したリーフレットと朝日新聞道内版をみて応募したらしい人々は約三十人にとどまっていた。しかし朝日新聞が首都圏の新聞で報知すると急に申し込みがあり当初予定の四十人を越えて四十四人となり、さらにキャンセル待ちが出るほどの人気だった。四十四人の地域別分布は札幌市内二十四人、その他道内七人、東京都内六人、神奈川県内六人、千葉県内一人であり、男女別は男十三人、女三十一人、平均年齢は五十三歳という顔ぶれ。この中には夫婦や母子もいる。協会からは林学者の小関副会長、紺谷常務理事が同行。小関教授は北海道の森林の特色からはじまり各所でこまめに説明してくれた。また福地理事が乗客の一人として参加し熱心に手伝ってくれた。

出発は九月十二日バスを北に向け、まず明るい感じの広葉樹林・利根別自然休養林（岩見沢）を歩き、次に旭川のすぐ近くの北邦野草園をみる。野草園が予想以上に広大で充実していること、エゾリスが目の前を平然と歩くのに驚かされる。このあと層雲峡を車中からみるという旅行社発案の観光サービスを盛り込みながら丸瀬布温泉の国民宿舎に一泊。空気は冷たくすがすがしくなっている。

十三日午前中はこの旅行の大きな目的である遠軽の家庭学校の森を加藤教務部長の案内で歩く。この学校の先生と生徒が手入れしている森林はすくすくと育って美しく、簡素で大きな教会とも見事に調和している。そこを発ったバスの中から「このような生活が最良ではないか」「軽井沢などに行く必要がない」とのささやきが聞かれた。

このあと南下して阿寒の前田一歩園へ。新妻理事が密林の中で説明してくれる。その森の広いこと。国立公園で施業が制限されているため、うっそうとして人を近づけない様子がある。その日の宿泊は池田町の「まきばの家」で。夕食は牛肉と野菜とワイン。

十四日は帯広を通って札幌へ向う。帯広では同市が市街地のまわりを買いとって長さ十一キロ、面積七百㌶の森でとりかこもうとする雄大な都市公園計画の一端をみる。午後には日本一の美林といわれる富良野の東京大学演習林へ。

そこでは役人から東大教授になった渡辺林長が待っていてくれ熱心に喜ばしそうに自然と調和する林業について講義。次にバスで広い演習林に入り、クマもクマゲラも多い自然林をみる。地形のけわしいところは原生林を残し、その他のところでは老木を切っては同じ樹種の木を育てる天然林施業を行っている。森林はうっそうとせず、さわやかな感じだ。しかし時間がなく歩けなかったのが残念。

三日間とも晴天。合計千㌔の旅。参加者の間からはもっと森林の中を歩きたかった。三泊四日の旅にすべきだったとの声が出ていた。北海道の内陸部に点在する森林を三日でまわる不安は最初からあった。しかし、いまとなっては、めったに見ることのできない美林を安価で手早くみてもらい、人間と自然とのかかわり方を考える手がかりとなったにちがいないと思って自らをなぐさめるしかない。（当協会常務理事）

昭和六十一年十月十五日発行
〒060 札幌市中央区北一西七 広井ビル五階
発行所 社団法人 北海道自然保護協会
電話（〇一一）二五一―五四六五
郵便振替口座 小樽 一―四〇五五
北海道拓殖銀行本店 〇一七二五九
北海道銀行本店 一〇一四四四
発行人 八木 健三
印刷 広報社印刷株式会社

※本誌は再生紙を使用しています。